

# 埋文よこはま17



財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター 平成20年3月28日発行

## 古墳に樹てられた埴輪たち

—戸塚区上矢部町富士山古墳と緑区北門1号墳の埴輪—

### ◆埴輪の起源と移り変わり

埴輪は、古墳時代（西暦300年頃～700年頃）を代表する遺物のひとつです。その起源は、弥生時代後期（西暦200年頃）に吉備地方（現、岡山県）を中心とする地域のお墓に供えた土の器にあります。壺形土器とこれのをせるための台（器台）です。それらは赤く彩られ、器台形土器には特殊な孔があげられ、特殊な文様が描かれています。

前方後円墳など、定まった形のお墓（古墳）がつけられるようになると、次第に供えられた器が埴輪に変化します。初めは壺形埴輪や器台形埴輪とよばれるように、前代の形を保っていますが、やがて器台形埴輪は、土管のような筒形（普通円筒埴輪）になり、器台に壺がのる姿を壺の胴体を省略して表現した朝顔形埴輪になります。これらを総称して円筒埴輪とよんでいます。

やがて家形埴輪が登場し、さらに盾や鞆（矢を納めて背負う武具）などをかたどった器財埴輪も墳丘上に樹てられるようになります。西暦400年代には、鳥や馬などの動物をかたどった埴輪もつくれます。その後半には人物をかたどった埴輪も加わり、形象埴輪が出そろいます。関東地方では、西暦600年前後まで盛んに樹てられています。

### ◆横浜の古墳と埴輪

横浜市内には、およそ80基の古墳が知られています。

およそ350～400年間につくられた有力者のお墓としては、決して多い数字ではありません。急速に市街地化が進められた結果、人知れず失われた古墳も相当数あったと思われます。また、西暦600年前後以降は、「横穴墓」とよばれる丘陵斜面に横穴をうがって墓室としたお墓がこの地域の主流を占めるという事情もあります。

市内の古墳は、初めに鶴見川や大岡川・柏尾川の各河川流域の重要地点につくられます。古代において、鶴見川・

大岡川流域は武蔵国の南部に位置し、鶴見川流域は橋樹郡と都筑郡、大岡川流域は久良岐郡、柏尾川流域は相模国東部の鎌倉郡に含まれていました。初期の古墳は、後の郡領域をカバーするかのよう存在し、被葬者はそれぞれの領域を治めていた人物といえます。

西暦450年頃以降には、それまで見られなかった地域にも古墳がつけられるようになります。

埴輪が樹てられていた古墳は、詳細不明のものも含めて13基ほどを数えるに過ぎません。西暦300年代後半につくられた青葉区稲



戸塚区上矢部町富士山古墳出土の盾持人物埴輪

荷前16号墳出土の壺は注目されますが、最も早く埴輪が樹てられた古墳は、現在のところ西暦450年前後の港北区日吉矢上古墳とみられ、港北区綱島古墳の例がこれに次ぐものと考えられます。これらの古墳の埴輪には、まだ形象埴輪を確認することができません。ここでは、ふたつの古墳から発見された埴輪たちの一部を紹介します。

### ◆戸塚区上矢部町富士山古墳出土の埴輪

上矢部町富士山古墳は、墳丘の径25mほどの円墳です。瀬谷区三ツ境付近を源流とする阿久和川が柏尾川に合流する付近の丘陵上に営まれていました。その標高はおよそ

50mあり、北東丘陵裾には「富士山 正福寺」があります。

発掘調査は、上矢部町富士山古墳調査団により平成元年8月より翌年の9月まで、数次にわたって断続的に行われました。墳丘は頂部が大きく削られ、東側がくずれていて本来の形を保っていませんでした。埋葬施設も残っていませんでした。しかし、墳丘の西側から南側にかけて、幅2mほどの「周溝」とよばれる溝が掘られており、墳丘の斜面から溝底にかけて多量の埴輪が掘り出されました。

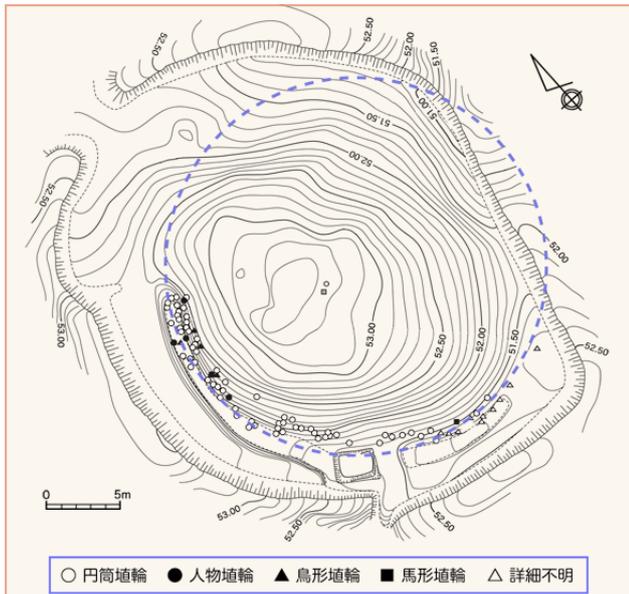


盾持人物埴輪出土状況

この古墳は、埴輪の特徴から西暦550年前後につくられ、この地域の有力者を埋葬したものと推定されます。

掘り出された埴輪には、4体の盾持人物埴輪をはじめ、馬形埴輪、鳥形埴輪などの形象埴輪と20個体を超す円筒埴輪があります。このほか、かけらがたくさんあります。

前ページの盾持人物埴輪は、いずれも半身像で、手足の表現がありません。墳丘の西側に集中して出土しました。中央の埴輪の高さは80.7cmあります。盾に着けられた模



上矢部富士山古墳墳丘測量図と埴輪の分布

様はそれぞれ違っています。中央の人物の頭が壺や甕の口のように開いています（開口頭部）。両端の人物は、頭の頂きに棒状のものが付く庇のない帽子をかぶっています。左端の帽子には細い帯のようなものが表現されています。

ところで、人物埴輪の目と口は、粘土をくりぬいて表現されます。それらの大きさや形、配置のバランスなどによって表情が変わります。目を円く切り抜くとあどけない表情になったり、目尻を下げて細く切り抜くと悲しみに満ちた表情になったりします。また、反対に口を円く切り抜くと動きのある明るい表情になったりします。眼が表現されない人物埴輪でも、その表情は実にさまざまです。

この古墳の盾持人物埴輪の表情はどうでしょう？ どの顔も長い眉毛が水平に表現されています。そして、どの人物の目も口も下端に丸味のある程よい形と大きさで切り抜かれています。それらは、正三角形を描くように配置されています。どれももの静かで端正な顔立ちをしているといえます。ただ、右端の人物の口は、鼻に対してやや左に寄っており、何やらもの言いた気な表情をしています。

盾持人は、冷静沈着な表情で行み、聖なる領域に侵入しようとする邪気を防ぐ役割を果たしていたのでしょうか。

#### ◆北門1号墳出土の埴輪

北門古墳群は、鶴見川の支流である恩田川南岸の丘陵上に位置しています。その標高はおよそ40mあり、北東に恩田川の流れを望みます。古墳はこれまでに5基が知られていますが、この古墳群の中をJR横浜線が通っており、すでに一部が破壊されていました。

発掘調査は、株式会社盤古堂が担当し、平成16年（2004）に行われました。4基の円墳が調査され、ほぼ全体が明らかにされた1号墳からたくさんの埴輪が発見されました。1号墳は、墳丘の径およそ16mあり、その外周に幅2mほどの周溝がめぐらされていました。埋葬施設は、南東に開口する泥岩の切り石積み横穴式石室で、その全長は4.8mあります。この古墳がつくられた時期は、埋葬施設や埴輪の特徴などから西暦500年代の後半と考えられます。

1号墳から発見された埴輪には、円筒埴輪・人物埴輪・馬形埴輪・器財形埴輪があります。人物埴輪には、男女があり、女子はいずれも半身像で、島田髷風の髪形が表現されています。男子には全身を表した立像も見られます。馬形埴輪は鞍や耳のかけらから、その存在を知ることができます。



遺跡の場所

器財形埴輪には、盾形埴輪や鞍形埴輪などがあります。これらの埴輪は、石室の背後にあたる北西部の墳丘の裾から周溝内に集中し、鞍形埴輪は、石室開口部の向かって右側の墳丘の裾から出土しました。

ここに紹介する一体の人物埴輪は、最も集中する場所から出土したものの中から復元されたものです。残りは良くありませんでしたが、上着の袖の部分や沓が手掛かりになりました。

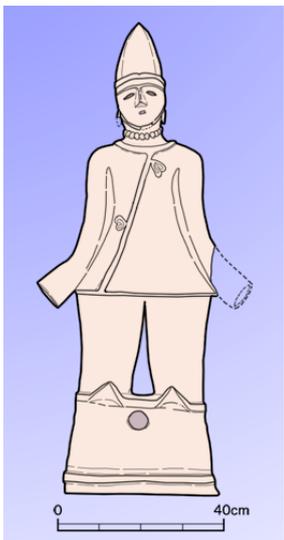
また、千葉県市原市の山倉1号墳から発見されたひとつの人物埴輪によく似たものがあることが知られ、復元作業を進める上で参考とされました。山倉1号墳は、全長45mほどの前方後円墳で、墳丘につくられたテラス状の場所に多種・多彩な埴輪が多量に並べられていました(米田耕之助 1976「上総山倉一



北門1号墳出土埴輪

号墳の人物埴輪』『古代』第59・60合併号 早稲田大学考古学会)。

こうして復元された一体の全身立像の人物埴輪は、三角形の頭巾をかぶり、筒袖の上着にふくらとしたズボンのようなものを身にまとい、先の尖った沓を履くという姿をしています。顔の輪郭には頭巾をとめる頸紐が表現され、両目尻の下がったその表情は、かなし気です。正面からの写真ではわかりませんが、両耳には耳飾りが付けられています。首の下の方には上着の襟が表現され、お腹の辺りには結ばれた紐が表現されています。武器や武具が表現されていないこの人物は、いわば「文人」と言えるでしょう。

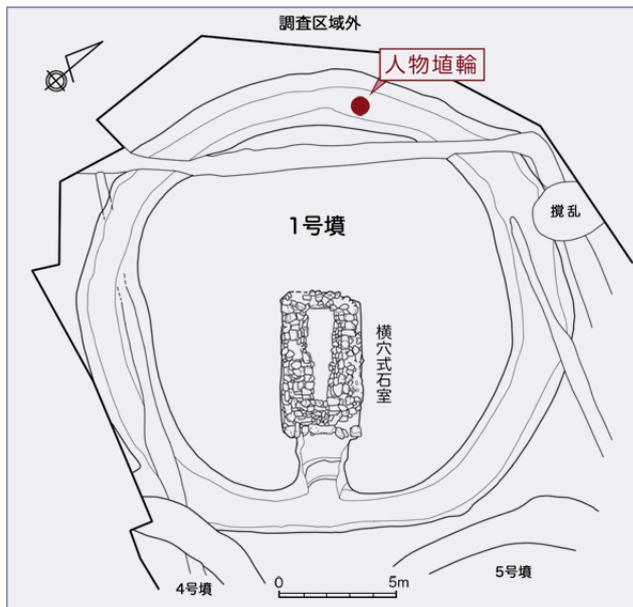


千葉県山倉1号墳出土埴輪

#### ◆埴輪たちはどこでつくられた？

横浜市内では、これまで埴輪製作に関係する遺跡は一例も発見されていません。では、ここに紹介した埴輪たちはどこでつくられ、どこからやってきたのでしょうか？

埴輪は、粘土をこねてつくった焼き物です。粘土にはさ



北門1号墳測量図と人物埴輪の出土位置

まざまな鉱物などが含まれており、地域差があります。これを調べるのが手掛かりのひとつです。もうひとつの大きな手掛かりは、造形の作風です。

上矢部町富士山古墳の開口頭部の盾持人物埴輪は、茨城県南部の霞ヶ浦周辺地域の人物埴輪に似た作風があり、注意されます。北門1号墳の埴輪は山倉1号墳の埴輪とともに、粘土に含まれる鉱物・焼成・作風などから、埼玉県鴻巣市の生田塚埴輪窯跡でつくられたものと推定されています。横浜の埴輪たちの多くは、意外にもはるばる遠隔の地から運ばれてきているようです。

#### ◆古墳と埴輪たちの今

ここに紹介した古墳は、いずれも開発により失われています。現在、見学することはできません。埴輪たちは、本来の居場所を失ってしまったのです。しかし、発掘調査が行われたことにより、その記録類とともに後世に伝えられることになりました。

上矢部町富士山古墳出土の埴輪群は、平成3年(1991)に横浜市指定文化財となりました。現在、横浜市歴史博物館に収蔵されており、その一部は常設展示室で公開されています。北門1号墳の埴輪群は、平成18年(2006)に横浜市指定文化財となり、これも横浜市歴史博物館に収蔵されています。

なお、ここでとりあげた古墳と埴輪の関係図書には次のものがあります。

- 1 上矢部町富士山古墳調査団 1991『横浜市戸塚区上矢部町富士山古墳調査概要』
- 2 横浜市歴史博物館 2001『企画展 横浜の古墳と副葬品』
- 3 株式会社 盤古堂 2007『横浜市緑区北門古墳群Ⅰ』



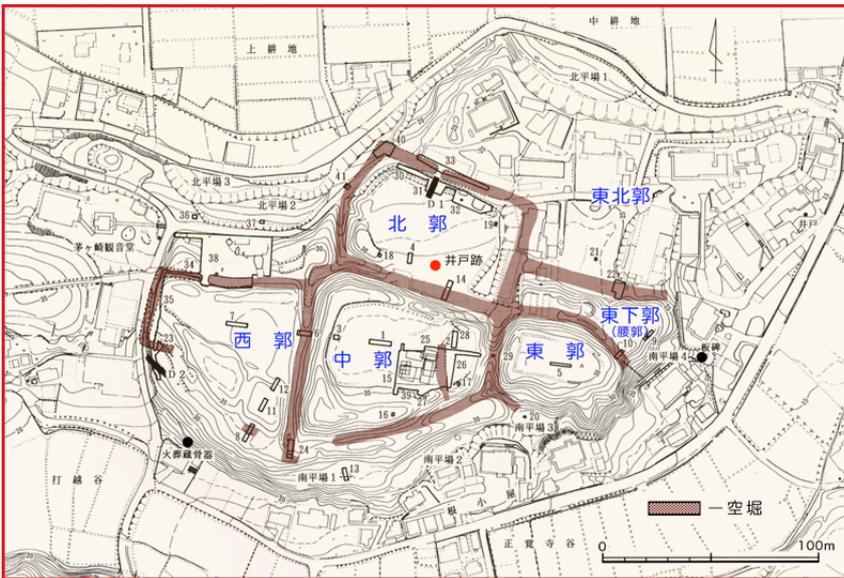
茅ヶ崎城址は、市営地下鉄3・4号線「センター南駅」の東およそ350mにある中世の城あつです。このお城は、鶴見川の支流である早瀬川中流の南岸に位置し、西から東に連なる標高およそ35mの丘陵をたくみに利用して築かれています。地元では「じょうやま」と呼ばれています。丘陵の裾の部分を含む総面積は、およそ5.5ヘクタールに及びと推定されます。

東側には後の中原街道、西側には矢倉沢往還(大山道)が通っており、早瀬川沿いの道は、神奈川湊と武蔵国府を結ぶルートのひとつでした。茅ヶ崎城は、交通の要衝の地を占めていました。

茅ヶ崎城址は、堀や土塁、それらに囲われた郭(曲輪)など、大変残りの良いことで知られています。東郭・中郭・西郭・北郭の四つを主要な区画とし、東郭北東の堀に接する腰郭などもあります。丘陵中腹には、「平場」と呼ぶテラス状に作られた場所がいくつもあります。残念ながら城に関する記録が伝えられていないため、作られた時期や城主など、多くの謎に包まれています。

平成2年(1990)～平成17年(2005)にかけて、8回にわたる小規模な発掘調査を行いました。この結果、郭や堀・土塁に少なくとも2回の大きな修築改築の痕跡が認められ、その変遷が辿れるようになりました。成立時は、堀で囲まれた東西ふたつの郭が主要なもので、14世紀終わり～15世紀前半頃と推定されます。15世紀後半には、堀の掘り直しや土塁の改築が認められます。16世紀前半～中ごろには、西郭の中央を南北に掘り切って中郭が作られ、さらにその北側に北郭などが作られます。城構えはこの時点で大きく変わっています。

現在、横浜市が歴史公園として整備を進めているため、立ち入ることができませんが、平成20年度中には一般に公開される予定です。新たなスポットがひとつ増えます。



茅ヶ崎城址全体図



中郭から発見された倉庫などの遺構群

### 埋蔵文化財センターのご案内

出土品や整理作業の様子を見学できます(予約が必要です)。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。  
 受付：午前9時～午後5時。土・日・祝日休み。  
 交通：東横線「綱島駅」より東急バス1番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

ホームページアドレス

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/index.html>

\*「埋文よこはま」は、横浜地域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

### 埋文よこはま 17

発行日 2008年3月28日  
 編集・発行 財団法人横浜市ふるさと歴史財団  
 埋蔵文化財センター  
 〒224-0034 横浜市都筑区勝田町760  
 TEL 045-593-2406  
 FAX 045-593-2403